

生活

雪の降る季節に想い出すこと

本県には奥羽、阿武隈の二つの山脈を挟んで、三つの郷がある^{くに}と云われている。私は五十歳も半ばの頃、中通りから会津に転勤になった。先輩から、「会津は大変だよ」という言葉を餞別にいただき、何が大変なのかも考えずに、忘れもしない三月二十六日、事務引継ぎということで会津坂下町へ向かった。当日、福島市は晴天であったので、自動車のタイヤはノーマルで、滑り止めも持たずに出かけたのであった。

ところが途中磐梯町近くになった頃、突然、季節はずれの雪が降り出し、自動車道は十五センチほどの積雪となり、磐梯PAのGSにも滑り止めはなく、当該校に電話連絡はしたものの、結局、訪問は大幅に遅れ、この日、降雪のなかった当該校の校長さんには、やや不機嫌に迎えられた。これが私の会津着任の第一歩であった。

勿論、会津は観光などで著名なところには行っており、ある程度知ってはいたが、第一印象とあいまって「やれ、やれ、えらいところへ来てしまったぞ」が正直な思いであった。教職員も生徒も保護者も誰一人として知人の居ない土地は、暫くは異国に居る思いであっ

た。単身赴任であった私は土日であっても、実家には帰らず、なるべく地域の方々との交流の機会を多く持ち、土地柄や風土に馴染むように努めた。一年ほどすると、教職員と冗談を言い合えるようにもなり、PTAも同窓会も真心込めて協力してくれるようになった。

会津での最初の冬を迎えた時、朝、起きて新聞を取りに出ようとすると、玄関の戸が開かない。いつもと違って雰囲気も変だ。不思議な明るさの中には音がない。ようやく雪だと気がついた。何とか戸を開けると、ドサリと玄関に大量の雪が入ってきた。積雪は一メートル以上はある。車庫のない自動車は小山に形を変えている。幸い学校は遠くなかったので、近道の畦道をラッセルしながら出勤してみると、教職員も生徒諸君も何事もなかったように落ち着いた様子である。なるほどこれが雪国の生活なのだ。

私は昼休みに公舎の雪掃きのために家へ戻ってみて驚いた。雪はすっかり掃かれていたのである。実は、これ以前から野菜や、果物などが玄関前に置かれていたのであるが、それが誰からなのか分からずに、お礼も言えずに困っていた。この雪掃きも会津流なのであったのだ。

真冬、降りしきる雪の中を鳶^{とび}たちが、ゆったりと大空に輪を描い

ているのを見て、この鳥たちは翼があるのに、なぜ、東の山を越えて雪のないところへ移らないのだろうと疑問に思ったものであった。会津には「会津の三泣き」というよく知られた言葉がある。因みにその三つを挙げてみると、雪に泣き、人情に泣き、別れに泣く、という俚諺である。鳶が他所へ移らないのは鳥でさえも会津は棲み易いところなのである。会津の冬の厳しさと純白の雪のような心の有りよう、そして、生活の一部となっている「結い」の素晴らしさと、飯豊山の荘厳さ、それにも増して、雪をも融かす会津人の心温かさは、雪空に舞う鳶がその疑問を明解に解いてくれたのであった。

初夏のある日、相談したいことがあるので夜七時に坂下町の役場に来て欲しいという電話が来た。教員という人種は常に学校のことしか頭にないので、私は直ぐに生徒のことだなと思った。それにしても役場の会議室とは大仰なと思うと同時に、これは重大事件かも知れないとも思った。私は少し遅れて出席したのだが、会議室には十人ほどの見慣れない顔があった。しかも、その並び方が一様ではない。二組が対面するように座っているのである。私はその両者の間に案内された。会津人は日頃は寡黙であるが声は大きい。私は生徒の問題との思い込みがあつたで身を小さくして座った。両側の人

たちはそれぞれに意見を述べ合っていたが、「ワシ」「ワシ」という単語ばかりが聞こえてきて主題の要旨がつかめない。それでも生徒や学校のことではないことだけは解ってホッとした。私が困惑しているのを見て司会者は議題のあらましをまとめてくれた。

——会津柳津町から南会津の昭和村へ抜ける途中に博士山という岩山がある。この山の岩棚に国の天然記念物に指定されているイヌワシが巣をつくり、雛を育てているのが発見されたという。ところが、この周辺は営林署が杉の木の間伐地区に指定しており、チエンソーの音がイヌワシに脅威を与えている。しかも、ここには自動車がやっと通れる林道が一本あるだけである——

この問題で野鳥の会と森林伐採を生業とする地元業者がぶつかるのは自然であった。この難問を私に相談するとは、お門違いではないかと思ったが、国や県から派遣された長は一応私見を述べなければならなかった。初めのうちは業者の「死活問題だ」などという厳しい意見と営林署の「国の施策による年次計画である」との対立は解決点を見え出せないかに見えた。しかし、どんなに激しく意見を述べる人でも、一応自分の言分が云い終わると二の矢は間遠うまどになる。私は黙って聞き手にまわっていた。これも大事な役目なのであ

る。暫く両者の沈黙が続いたが、営林署の所長が妥協案を出した。「予算化されている国の計画を無視することは出来ないが、その代わり雛が巣立つまで、イヌワシを驚かさないように、手作業で下草刈り作業をすることにしましょう」参会者から異論は出なかった。会津営林署所長は見事にトリを取ったのである。この所長は会津出身の人で会津人の気質を心得ていたのである。私はこれが縁でこの人とき折り地酒を酌みかわした。ある時の言葉が振るっていた。彼が云うには「イヌワシでもスズメでも鳥は鳥、会津人というのは筋というか建前を大切にする人たちなんです。自分たちの言分が真摯しんしやくに聞き入れられれば少々不都合があっても相手の気持ちを斟酌しんしやくするんです。これは戊辰戦争以来、上から下々まで今日まで続いている会津人としての在り方なんですよ」あの時もしこの人が「法」という矛を振り回していたなら、あの夜、散会時の笑顔はなかっただろう。私は会津の一部分を垣間見た思いだった。この夜の酒は特別に美味しいものとなったことは言うまでもない。

その会津人との交流は、あいづびと「そばの会」として、雪の降るころ、こんにち今日に続いている。